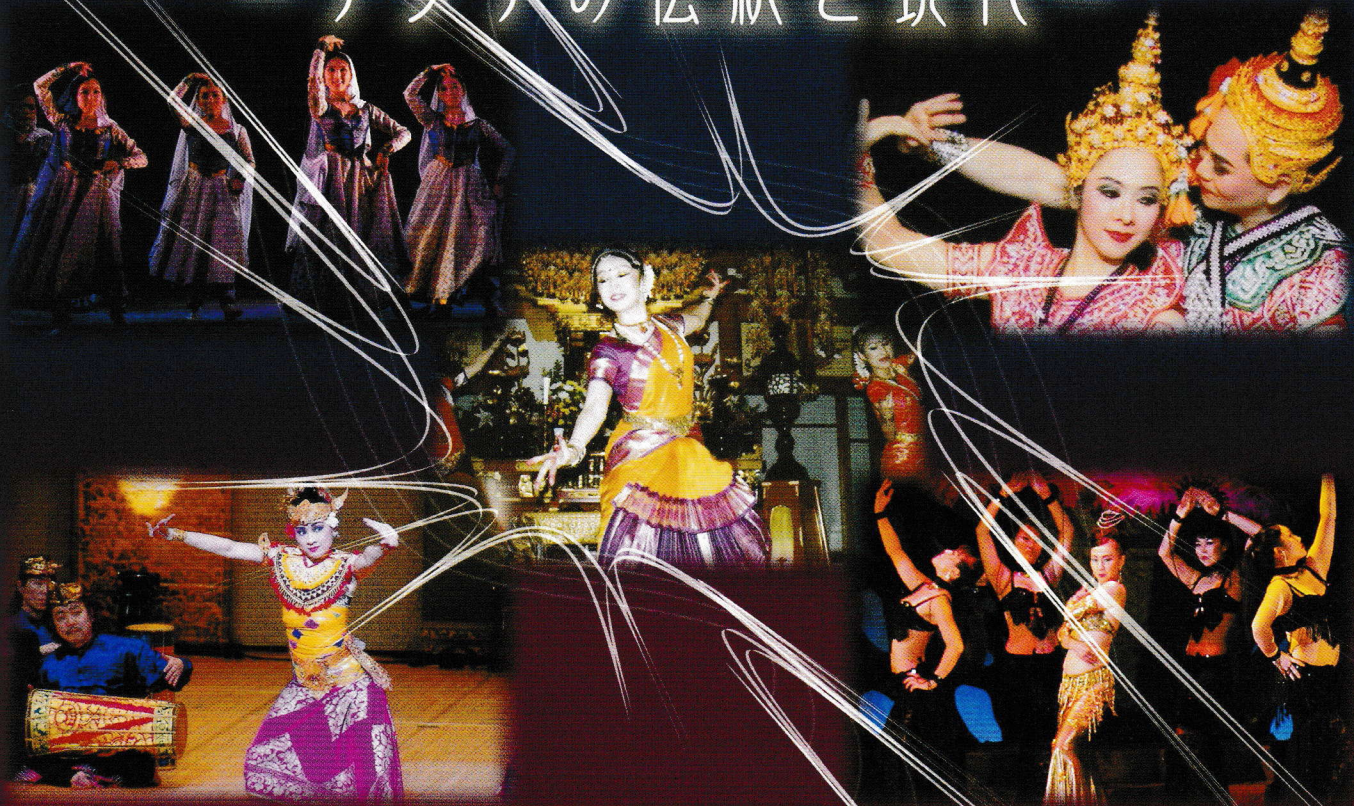


文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」選定（2006～2008年度）
大東文化大学国際関係学部「アジア理解教育の総合的取組」関連企画

第2回 アジア芸能のタベ

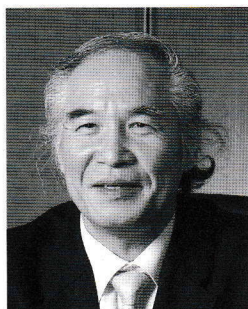
— アジアの伝統と現代 —



大東文化大学東松山キャンパス60周年記念講堂
2008年12月6日(土) ▶ 7日(日)



主催 / 大東文化大学国際関係学部 後援 / 東松山市・東松山市国際交流協会



歓迎の言葉に代えて

大東文化大学 学長
渡部 茂

「アジア芸能の夕べ」によるこそお出でくださいました。大東文化大学を挙げて皆様の御来場を心より歓迎いたします。この催しは今回で2度目であり、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に選定されました国際関係学部「アジア理解教育の総合的取組」の一環として企画されたものであります。

「東西文化の融合」を建学の精神とする大東文化大学で、しかも政治、経済、社会を含むあらゆる面で世界的にその比重が大きく高まりつつあるアジアを理解するために、文化の重要な担い手である芸能にスポットを当てたこのような企画が催されることはごく自然な成り行きであるとはいえ、大変喜ばしいことであります。できれば、今後も継続することで、大東文化大学がアジア文化に関する情報の収集・分析・発信基地として、また、留学生、一般学生、教職員、地域の方々、そしてアジアに関心のあるすべての方々の交流拠点として、皆様のお役に立てればと願っております。

いうまでもなく、アジアには実に多様な政治・経済・社会体制、芸能、宗教、言語、気候、および風土が見られ、その多様性が時として多くの不幸な紛争の火種になっているということも確かであります。同時に東洋の深遠にして豊かな文化を生み出す土壌ともなっております。だとすれば、この豊かな文化を相互に理解し、共有していくことこそアジアの国々あるいは地域の相互信頼、相互交流、安定、および平和につながる大切なひとつの道ではないでしょうか。

私は専門の関係で若いころはヨーロッパを中心に研究を進めておりましたが、90年代に入ると、アジア、特に東アジアの政治・経済の現状と課題に関心が移り、台湾、韓国、中国、タイ、ベトナム、マレーシア、シンガポールと立て続けにアジア諸国を訪問し、経済・社会事情についてのレポートや論文を書き、韓国ソウル大学では研究発表もしました。同時に各国の豊かな芸能や食文化に触れることができ、自分のアジア人としてのDNAを深く自覚したものです。なかでも中国の京劇や人形劇、ベトナムの水上劇、各国の民族音楽や古典舞踊などには大いに感銘を受けたものでした。

この「アジア芸能の夕べ」に参加され、アジア各国の芸能の深さをじっくり味わっていただくことで、各国文化の豊かさを感じ、何がしかの感銘を受け、少しでもアジアに対する共感を覚える手助けをすることができれば、望外の幸せであります。

さあ、「アジア芸能の豊かさと深遠さを発見する旅」に一緒に出かけましょう！

夢幻の世界へ

国際関係学部長

松井 弘明



文部科学省により選定された「特色ある大学教育支援プログラム」の一部として行われる国際関係学部「アジア芸能の夕べ」は、関係各方面のご協力のおかげで、昨年に続き第2回の開催を迎えることができました。昨年近隣の皆さんをお招きし公演した、インドネシア、韓国、インド、中国の民族音楽・舞踊は大変御好評を頂いたと思っています。

わが国の小・中・高等学校における音楽の時間といえば、クラシックを中心とした西洋（民族）音楽の学習に多く当てられているようです。これは明治以来あらゆる分野で、進んだ西洋に学ぶという考えがこの分野でも取り入れられたせいかもしれません。そのためかどうか、日本がアジアに属しながらアジアの伝統芸能はほとんど知らないというのが平均的日本人ではないかと思います。かく言う私自身も例外ではなく、それだけに昨年の公演には新鮮な感動をおぼえました。同時に、はじめて見るものの中にも、どこか懐かしさを覚えたものでした。それは、音楽のリズムや舞踊の動きの中にそれぞれ独特なものを含みながら、また日本舞踊や雅楽と共通するものを感じるからかもしれません。

今回は初日がタイとインドの舞踊、2日目がインドネシア・バリ島とアラブの音楽と舞踊です。国際関係学部では、正規の授業としてインドネシアの楽器ガムランを学ぶ時間が設けられていますが、今年幸いなことに高価なガムラン（青銅打楽器群）をゆずりうけることができました。そのお披露目の演奏会でその豊かな響きと優美な舞踊に接し興味を持った私は、指導の先生にお願いし演奏を体験させてもらいました。全くの初体験ながら、さまざまなタイプの打楽器が響きあう音の中に身をおくと、身体が浮遊しているような心地よさを感じたものです。ちょうどその頃日本では珍しい本格的なインドネシアの影絵芝居「ワヤン」の公演があり、数人の学生と鑑賞しこれにも魅了されました。

インドネシアばかりでなくアジアの舞踊・音楽・芝居は神や精霊、神話、伝説をあらわすものとして、また人知を超えたものに対するおそれと祈りの気持ちを表すものとして生きており、それだけに人々の日々の生活と切り離せないものであるそうです。他のアジア諸国より一足早く近代化した日本は、それとともにこのような情緒ある生活環境を失ってしまったような気がします。今も生活と伝統芸能が溶け合っているアジア諸国の人々をうらやましいと思わないでもありません。さて今宵ひととき、アジア伝統芸能の夢幻の世界を皆様とともに楽しませていただくことにしましょう。そしてこの「アジア芸能の夕べ」が、学内ばかりでなく東松山市の伝統行事となってゆくことを願いたいと思います。

Program



2008年12月6日(土)

■体験講座「インドネシア、中部ジャワのガムラン音楽体験」

講師 小迫直子・大東文化大学学生・卒業生

時間 1回目 15:00～15:50、2回目 16:00～16:50

■公演「アジア芸能の夕べ 第一夜」

開演: 18:30

司会 関谷元子 (NHKFM「アジア・ポップス・ウインド」パーソナリティ)

第一部

タイの古典舞踊

出演 秋元加代子タイ舞踊団

演目 1. サッチャトゥリー 2. シーウイチャイ

北インド古典舞踊カタック

出演 みやびカタックダンスアカデミー

演目 1. タラーナ 2. グル・ヴァンダナ 3. ティーンタールのヌリッタ

休憩

第二部

タイの民俗舞踊

出演 秋元加代子タイ舞踊団

演目 1. トゥントウクロンヤーオ 2. ロンレーン 3. ポンレーン

南インド古典舞踊バラタナーティヤム

出演 コンテンポラリー・ナティヤム・カンパニー

演目 1. プシュパーンジャリ〜タムタムタム 2. クリシュナ・ストートラム
3. クリティ「カイラーサナーテーナ」

南北インド古典舞踊の競演

出演 みやびカタックダンスアカデミー

コンテンポラリー・ナティヤム・カンパニー

演目 ティッラーナー

☆舞台監督 中村 卓

照 明 土屋弘志

音 響 磯沼信男



2008年12月7日(日)

■体験講座「バリ舞踊体験」

講師 富沢香寿美

時間 1回目 11:00～11:50、2回目 12:00～12:50

■公演「アジア芸能の夕べ 第二夜」

開演：16:30

司会 関谷元子 (NHKFM 「アジア・ポップス・ウインド」パーソナリティ)

第一部 インドネシア、バリ島のガムラン音楽と舞踊

出演 サリ・メカール

- 演目
1. ジャグル・ブバロンガン
 2. ガボール
 3. マルガパティ
 4. オレグ・タムリリンガン

休憩

第二部 アラブの舞踊ベリーダンス

出演 アルカマラーニ・ダンスオリエンタル・カンパニー

- 演目
1. マリオブスカトレセニカ
 2. ロンピロンピ
 3. ミザルー
 4. ワフワフ
 5. ライラットホブ
 6. アルフレイラワレイラ
 7. ゼイナ

☆舞台監督 中村 卓
照 明 土屋弘志
音 響 磯沼信男

タイの古典舞踊と民俗舞踊

■ 出演者紹介

秋元加代子タイ舞踊団

タイ芸術局とタイ王立舞踊学校より、外国人として初めて特別上級認定証を授与されタイ舞踊家として認められた秋元加代子が主宰するタイ舞踊団。タイ王立舞踊団と共に、タイ国と日本において20年以上に渡り定期的に公演活動を行っており、またASEAN10カ国の舞踊団と交流を重ね、共演してきた実績を持っている。タイ国においては、タイ国王より芸術・交流活動に対して数々の勲章を授与されている。



秋元加代子



タイ王立舞踊学校及びチュラロンコーン大学芸術学部タイ舞踊科でタイ舞踊を学び、同校講師も務める。日本においてタイ舞踊家の第一人者として幅広く活躍しており、その実力と功績は本国のタイ王国からも認められている。舞踊家としての活動のほかにも、日タイ合同舞踊公演のプロデュースや、舞踊でアジアに交流の虹の架け橋をかけることを目的とした「虹の舞シリーズ」をプロデュースし、高い評価を得ている。また、市川猿之助演出の明治座公演「アユタヤの星」の振り付け、ラベル作曲「ボレロ」に様々なアジアの舞踊テクニクを取り入れた「アジアボレロ」をはじめ、数々の創作も手がけている。現在、日本・アジア芸術協会理事長として、アジア各国の舞踊団と交流し、公演活動も積極的に行っている。また、アジアカルチャーセンター銀座サロンにおいてアジアの芸能を紹介し、サロンステージ等の活動も定期的に行っている。著作として、日本で初めて日本語でタイ舞踊全般にわたって解説した、秋元加代子『タイ舞踊』（日本・アジア芸術協会出版、2001年）がある。

出演

舞踊：大塚弘美、山田美智子、清水純子、江本美奈子、奥村由加里、近藤けい子、鈴木麻子、

佐久間康子

解説：秋元加代子



解説 タイ舞踊

タイ舞踊は、指先を反らせてしなやかに優雅に踊る大変美しい踊りです。タイの古典舞踊では、きらびやかな冠と金糸・銀糸を使った華やかな衣装をつけて踊ります。タイ各地の民俗舞踊は、その地方の特色が生かされた音楽とともに各地方独特の可愛らしい衣装をまとうて踊ります。本日はタイの古典舞踊とタイ各地の民俗舞踊を披露します。

タイの古典舞踊

1. サッチャトゥリー

この踊りは南タイの代表的な古典舞踊です。軽快な太鼓のリズムに合わせて、手には金の長い爪をつけて踊ります。「ワイクルー」という師匠を敬う儀式などにも使われ、タイでは大変人気の高い古典舞踊の1つです。通常は男女で踊られますが、今回は女性だけの編成にいたしました。

出演: 大塚弘美、山田美智子、清水純子

2. シーウィチャイ

7～13世紀にインドネシアを中心に栄えたスーウィチャイ帝国の文化的影響を受けた踊りです。タイとインドネシアの文化が融合された南タイの踊りで、振りや衣装はインドネシア風ですが、タイ舞踊の美しい型がふんだんにちりばめられています。タイ芸術局がスーウィチャイ時代の女性の姿から踊りの衣装の原形を作り、振りは中央ジャワのポロブドゥール遺跡に描かれている形とジャワの踊りから創作されました。

出演: 江本美奈子、奥村由加里、近藤けい子、鈴木麻子

タイの民俗舞踊

1. トゥントゥンクロンヤーオ

中央タイの代表的な民俗舞踊で、本来は男性が長い太鼓を持ち、男女で踊られますが、今回は女性のみの編成で創りました。お祭りなどでよく踊られる踊りです。

出演: 江本美奈子、奥村由加里、近藤けい子、鈴木麻子

2. ロンレーン

この踊りは南タイの民俗舞踊で、ざるを持って錫を鉱山から採る様子を踊りにしています。タイ南部地方は商業が盛んなため外来の文化をいち早く多く受けた地域です。そのためタイ独自の文化よりも、インド・マレーシア・インドネシアなどの文化の色合いがよく出ており、民俗舞踊にもその影響がはっきりと出ています。衣装は、インドネシアの「パテ」という布で作った衣装が中心になっています。

出演: 大塚弘美、山田美智子、佐久間康子

3. ポンラーン

東北タイの民俗舞踊で、東北独特のポンラーンという楽器のリズムに乗って軽快に踊られる踊りです。

出演: 大塚弘美、山田美智子、清水純子、江本美奈子、佐久間康子、奥村由加里

南北インドの古典舞踊

■ 出演者紹介

みやびカタクダンスアカデミー (MKD舞踊団)

2005年、北インド古典舞踊カタクのダンサー佐藤雅子によって設立される。佐藤雅子は1995年渡印、翌年より国立演劇舞踊学校カタク・ケンドラにてカタクダンスを学ぶ。99年からICCR奨学生。インドの人間国宝ビルジュ・マハーラージ師に直接師事し、師の舞踊団メンバーとしてインド各地で行われるフェスティバルに数多く参加する。2005年に帰国してみやびカタクダンスアカデミーを設立し、後進の育成に努める。国内・海外公演多数。伝統あるインド古典舞踊をベースに、日印文化を融合させた作品を意欲的に発表している。



MKD舞踊団は、みやびカタクダンスアカデミーのダンサー達で構成されている。設立してから歴史は浅いが、ナマステインディアをはじめ各種フェスティバル等へ積極的に参加し、着実に技を磨いている。優雅に、且つダイナミックに切れよく踊るラクナウ派カタクダンスの真髄に近づけるよう、自己研鑽を行っている。

出演

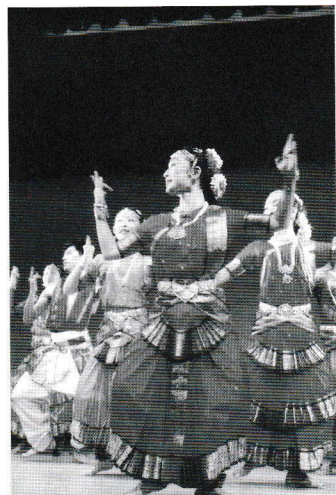
舞踊: 佐藤雅子 (MKD代表)、石井由実子、小林舞、松橋恵

演奏: 吉田こうき (シタール)、池田絢子 (タブラ)、井上貴子 (声楽・ハルモニウム)

コンテンポラリー・ナティヤム・カンパニー (CNC)

舞踊家の野火杏子によって1996年に創設された、新宿歌舞伎町を本拠地とする、南インド古典舞踊バラタナーティヤムとインド映画ミュージカルダンス及びインドディスコダンス=バングラの教室と舞踊団。古典舞踊科団員が師事するウマー・ラーオ氏は、南インド、カルナータカ州マイソールで「ラリタ・カラー・アカデミー」を主宰する舞踊家で、バラタナーティヤム最大のカラークシェートラ流の創始者ルクミニ・デーヴィに師事、20年以上に渡って教鞭を取り、世界各国で公演を行ってきた。CNC古典舞踊科は「ラリタ・カラー・アカデミー」の東京分校にあたる。

ポップスダンス科では、インド映画のヒット曲のダンスをステージ用にアレンジしている。インドは世界一の映画大国で、映画の約9割がミュージカル仕立てである。インド人の多くは映画の公開前に歌と踊りを覚え、映画館の中で熱狂的に歌い踊る。また、同科はインドディスコダンス=バングラも取り上げている。本校の他に、カルチャーセンター、西葛西、新御徒町、大島、東大島、練馬、用賀などで教室を開催し、グローバル・インド・インターナショナル・スクールの幼稚園、小学校の課外授業も担当。年2回の発表会のほか、「マサラナイト」(インドディスコ)などを主催し、各種イベント参加のほか、テレビ・雑誌・新聞等マスコミでも度々とりあげられている。



出演

舞踊: 野火杏子 (CNC代表、ナトゥヴァンガム)、井上佐知子、村越文香、吉沢智子、杉山恵里子

演奏: 井上貴子 (声楽・ハルモニウム)、荒井俊也 (ムリダンガム)、竹原幸一 (モールシン)、齋藤悠志 (タンブーラ)

解説 南北インドの古典舞踊

北インド古典舞踊カタク

カタクの「カタ」とは「語る」という意味。古代より、カタカと呼ばれる語り部たちが、インド各地を歩きながら、ヒンドゥー教の神話や英雄物語を人々に語り伝えたのが起源とされています。中世になって北インドがムガル帝国の支配下に入ると、カタカは芸術性を認められて宮廷に庇護され、華やかな宮廷舞踊として発展しました。独立後、この宮廷舞踊はカタクダンスと命名され、人間国宝ビルジュ・マハーラージ師によって、洗練された舞台芸術へと発展していきました。優雅で美しく切れの良いダイナミックな演目や群舞は高い評価を得て、今日、カタクダンスは北インドを代表する古典舞踊の一つとしてゆるぎない地位を得ています。

カタクの身体技法はフラメンコの原型ともいわれ、基本姿勢は直立姿勢、足にグングルと呼ばれる真鍮の鈴を100個から200個巻いて踊ります。軽快なステップ、多種の旋回、アラベスク模様を象ったといわれる所作、全身で感情を表現するアビナヤ（マイム）を特徴とし、高度なリズムのテクニックによって成り立っています。

1. タラーナ Tarana

ムガル宮廷で発展したといわれる華やかな演目です。

2. グル・ヴァンダナ Guru Vandana

グル（師）を神として称える歌です。

3. ティンタールのヌリッタ Nritha set to Tintal

ティンタールとは4+4+4+4計16拍で1周期となるターラ（拍子）、ヌリッタとは身体運動を中心とした舞踊です。レヘラーと呼ばれる16拍の決まった旋律の繰り返しのなかに、ボールと呼ばれる打楽器の口唱歌を入れ、レヘラーの1拍子目とボールの最後の音がぴたりと合って静止するという、動と静の対比が特徴的です。最初はゆっくりとした速度で、次第に速さを増していき、最高の速度に至ってクライマックスとなります。

南インド古典舞踊バラタナーティヤム

南インドのタミル地方を中心に発展した古典舞踊バラタナーティヤムは、かつてはヒンドゥー教寺院の巫女が神々に捧げるために踊っていたといわれますが、後に宮廷舞踊として大きく発展しました。イギリス植民地時代には消滅の危機にさらされましたが、舞踊家のルクミニ・デーヴィらによる復興運動を経て舞台芸術として再生されました。

身体運動を基本とするヌリッタは、アダヴと呼ばれる50種類近い型を組み合わせ、3段階のスピードで踊られ、複雑なステップと型の美しさを見せていきます。アダヴは、アラマンディという中腰の姿勢から、裸足で床を強く踏む動きが中心で、ステップを強調するために両足に多数の鈴をつけます。意味や感情を表現するアビナヤでは、ハスタと呼ばれる手の形や、ナヴァラサと呼ばれる9種の感情表現の方法を駆使し、ヒンドゥー神話を表現します。伴奏にはナットゥヴァンガムと呼ばれる小さなシンバルが用いられますが、これが舞台全体を指揮する役割を果たし、多くの場合舞踊の師匠によって担われます。これにマリダンガム（両面太鼓）が加わってリズムが強調されます。

1. プシュパーンジャリ〜タムタムタム Pushpanjali ~ TamTamTam

プシュパーンジャリとは神に花を捧げ、会の成功を祈る踊りです。タムタムタムは独特の型を組み合わせ、軽快に踊ります。

2. クリシュナ・ストートラム Krishna Stotram

（ラーガ：ヴリンダーヴァニ、ターラ：アーディ Raga: Vrindavani, Tala: Adi)

今年発売されたDVD付ブック『踊るヨガ』（リットーミュージック）のために作られたオリジナル新作の拡大版です。作曲は井上貴子、振付は野火杏子。ヴィシュヌ神の化身クリシュナを称える踊りです。クリシュナ神は黄色の衣装をまとい、サファイア色の顔をした美しい神で、誰からも愛されています。

3. クリティ「カイラーサナーテーナ」 Kriti: Kailasanathena

（ラーガ：カーンボージ、ターラ：ミシュラ・チャープ Raga: Kambhoji, Tala: Misra Chapu)

南インド古典音楽の巨匠ムットゥスワーミ・ディークシタル（1775-1835）の作詞作曲による名曲です。通常は歌曲として演奏されますが、野火杏子が新たな振付で挑戦します。ヒマラヤ山脈にあるカイラーサ山に住むシヴァ神を称える踊りです。この神は、ハスの花のような足もち、三日月を額に掲げ、真理と知恵と喚起を心に宿しています。

南北インド古典舞踊の競演「ティッラーナー Tillana」

（ラーガ：カダナクトゥハラム、ターラ：アーディ Raga: Kadanakuthuharam, Tala: Adi)

20世紀を代表する南インド古典音楽家バーラムラリクリシュナの作詞作曲による有名な舞曲です。リズムを表す言葉を歌詞にもつ軽快なこの曲に、バラタナーティヤムの野火杏子とカタクの佐藤雅子が新たに振付をしました。南北インドの古典舞踊の身体運動の共通点と相違点を生かした競演をお楽しみください。

バリ島のガムラン音楽と舞踊

■ 出演者紹介

サリ・メカール Sari Mekar

東京・平和島にあるガムラン・スタジオ「音工場Omori (おとこうば おおもり)」を拠点として、1997年から活動しているバリ・ガムランと舞踊のグループ。

最も一般的なアンサンブルであるガムラン・ゴング・クビヤール Gamelan Gong Kebyar (青銅の打楽器を中心にしたアンサンブル) のみならず、ワヤン・クリツ Wayang Kulit (影絵芝居)、ガムラン・アングルン Gamelan Angklung (青銅の打楽器アンサンブル) 等、バリ島の多岐に渡る芸能をそのレパートリーとしている。

1997年、音工場Omoriの前身である音工場HANEDAの十周年記念行事「神遊」の際に、バリ島から招聘中の著名な演奏家イ・ニョマン・スダルナ氏およびイ・マデ・スエ氏より「サリ・メカール (花開く)」と命名される。



バリ島のガムランと舞踊「音工場Omori (おとこうば おおもり)」

一般向けガムラン講座として1987年東京・大森南で「音工場HANEDA (おとこうば はねだ)」として活動を開始して以来、より多くの人々にバリ島の芸能を紹介していくことを目的とし、バリ・ガムランと舞踊の定期講座を中心に、ワークショップの開催、コンサート・イベント等の企画、制作を行っている。また、国内でガムランや舞踊に携わる人々の活動や交流の場も提供している。

2008年3月平和島への移転に伴い、名称を「音工場Omori (おとこうば おおもり)」と変更した。

出演

演奏：皆川厚一 (Kendang)、I Putu Gede Setiawan (Gangsa)、城島茂樹 (Gong)、
宮元真佐人 (Kajar)、渡辺泰子 (Gangsa)

舞踊：富沢香寿美 (Oleg Tamulilingan)、車田れい子 (Margapati, Oleg Tamulilingan)
今井志子・岡恵里香・萩原香織・山崎直子 (以上、Gabor)



解説 バリ島のガムラン音楽と舞踊

バリ島のガムラン音楽

「神々と芸能の島」と呼ばれるインドネシアのバリ島では、バリ＝ヒンドゥ教の寺院の祭礼や冠婚葬祭などの儀式で必ず舞踊やガムラン音楽が奉納あるいは上演されます。「ガムラン gamelan」とはインドネシア各地の様々な打楽器アンサンブルの総称で、地域によって特色があり、その中でもジャワ島中部、ジャワ島西部（スندا）、バリ島のものがよく知られています。

本日は、バリの多くの種類のガムランの中で、1920年以降、最も多く演奏されている「ゴング・クビヤール gong kebyar」という編成のガムランを演奏いたします。その楽器の多くは、銅と錫を混ぜた青銅から作られており、代表的な楽器では、「ゴング gong」（瘤付き銅鑼）、「ガンサ gangsa」（鍵盤楽器）、「レヨン reyong」（音階順に並んだ12個1組の瘤付き銅鑼）があります。それに「クندگان kendang」（太鼓）、「スリン suling」（竹笛）などの楽器が加わります。

バリ・ガムランの特徴として、コテカン kotekan と呼ばれる複雑なつがいリズムがあります。これは2人の奏者のフレーズが入れ子のように絡みあって、結果として1つのフレーズとして聴こえてくるものです。西洋音楽のアンサンブルのように各々が独立したパートとして存在するのではなく、全体の中の部分として演奏し、他人の演奏する音も自分のパートの1つとして捉える、世界でも珍しいアンサンブル形態です。また音階は西洋音楽の様な規格化されたものではなく、同じ名前の音階であっても、それぞれのガムランのセットによって、個々の音高や音程関係は異なっています。また、1セットの中でもそれぞれの楽器は合わせて鳴らしたときにうなりが生ずるよう、わざとずらして調律されています。通常は20人以上で演奏するガムラン「ゴング・クビヤール」ですが、本日はその中から中心となる楽器を取り出し、踊りの動きと楽器の掛け合いをお楽しみいただきます。

演目紹介

1. ジャグル・ブバロンガン Jagul Bebarongan

ジャグル Jagul とは「たたく」の意味。ブバロンガン Bebarongan はバロンダンスの伴奏に使用される編成で、チャロラナン Calonarang 劇、いわゆるバロンダンスの前奏曲として用いられる器楽曲です。

2. ガボール Gabor

歓迎の踊り。元々寺院の祭礼（オダラン odalan）の際の神迎えの踊りから発展したもので、今日では演奏会の時などに最初に踊られ、場を浄め、観客を歓迎する意味を込めて手に持った銀のお皿から花々を撒きます。

3. マルガパティ Margapati

1940年代に創作された舞踊で、男装した女性によって踊られます。バリ島の舞踊は動物の動きを模したものが多いのですが、この曲はジャングルの中を獲物を求めて歩く獅子の姿を、人間の姿を借りて表したといわれています。

4. オレグ・タムリリングン Oleg Tamulilingan

蜜蜂の求愛の踊り。「クビヤール・ドゥドゥック kebyar duduk」の作者として有名なイ・ニョマン・マリオによって作られました。一對の蜜蜂が花の回りで戯れる様子を描いており、今回は雄も女性によって踊られます。

アラブの舞踊ベリーダンス

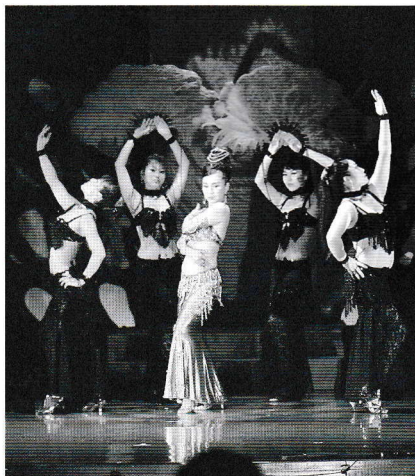
■ 出演者紹介

アルカマラーニダンスオリエンタルカンパニー

1994年、アラブ舞踊ベリーダンスの舞踊家MAHAの主
宰するダンスカンパニーとして創設される。語義的には、
「アルカマラーニ」の「アル」は定冠詞で「カマル」は「月」
を意味し、「アルカマラーニ」とは、直訳すると「太陽と月」
を表す。アラビア語には、単数、複数の中にペアのものを
表す「双数」という考え方がある。月が優位に立つこの言
葉は、月夜が美しい砂漠を思わせ、アラブらしい表現なので、
カンパニー名とした。

四谷大京町のスタジオを中心にNHK文化センター等に
て教室活動を展開し、数多くのベリーダンサーを輩出して
いる。2000年より、毎年夏に上野水上音楽堂にてカンパニー
公演をおこなうほか、毎年「四谷区民ホール」にて、アル
カマラーニ四谷スタジオ主催の発表会をおこなっている。

また、野毛大道芸、大須大道芸にも毎年カンパニーとして出演している。2004年には「Very Belly Dance」、翌年「Very Belly Dance2」（アオラコーポレーション）をリリースした。



出演ダンサー：MAHA、RUKA、Taeka、MOMO、MIO、Kiyoko、YUMI、Futaba

アラディーン

松尾賢をリーダーとするアラブ音楽およびジプシー音楽のアンサンブル。

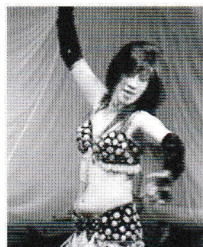
メンバー：松尾賢（ウード）、テディ熊谷（フルート）、及川景子（ヴァイオリン）
檜山学（アコーディオン）、平井ペタシ陽一（ドラブツカ）、
安藤亮輔（ダブルベース）、宮城康夫（ドラム）



MAHA



RUKA



Taeka



MOMO



MIO



Kiyoko



YUMI



Futaba

ベリーダンス

ベリーダンスは、古代オリエントの時代より連綿と続く女性特有の踊りで、母体信仰を起源としています。女性の曲線的な美しさを最大限に表現するこの踊りは、腰、腹、胸といった身体の部分の動き、特におなかの動きが特徴的です。ベリーダンスの「ベリー」とは、英語で「腹」の意味で、1896年のシカゴ万博で「ベリーダンス」として紹介されたのが、この言葉のはじまりです。この踊りは「オリエンタルダンス」とも呼ばれ、アラブでは「ラクスシャルキー」と呼ばれています。「ラクス」は踊り、「シャルキー」は「東方の」という意味です。バルカン半島のジプシーのダンスもベリーダンスの一種だといえますし、東は中国の少数民族であるウイグル族にもベリーダンスが存在し、かなり広い地域で踊られています。

揺らす、8の字をかく、円をかく、といった動きはまさに自然そのもので、大地の息吹や、水や大気の循環にも通じます。ベリーダンスは、踊っている女性の側からすると、自然で解放的で気持ちのいい踊りですが、男性の側からみると、男を誘惑する罪深い踊りのようです。ベリーダンスはエジプト、トルコを中心に、ほぼイスラーム圏に重なる地域に存在していますが、イスラームとは全く関係が無く、さらに古い女神信仰（母体信仰）の時代からあり、世界最古の踊りの一つともいわれます。イスラーム時代になって、この踊りは女たちの隔離された世界「ハーレム」でさらに続いてきました。イスラームは踊りを文化として認めなかったために、女性が女性的な部分を強調するという大衆の好む原始的なコンセプトの踊りが残ったのだと思われます。まさに本能的で官能的で、刺激的です。それが女性にとっての自然であり、男性にとっての誘惑となるのです。

このオリエント文化がヨーロッパに紹介されると、誰もがそのエキゾティシズムに夢中になりました。1920年代にパリで人気を博したダンサー、マタハリの登場、オスカー・ワイルドの戯曲「サロメ」の7つのベールの踊りなど、ファム・ファタール（男を破滅に導く女）のイメージが刺激的な流行となりました。1970年代には、アメリカ西海岸でヒッピー文化と相まって、自己解放の踊りとして、あるいはヨーロッパ文化以前のトライバルなものを感じさせる踊りとして、ベリーダンスは大流行しました。日本でも、ここ数年、急速にベリーダンス愛好家が増えてきています。

演目紹介 「Oriental Journey (東方への旅)」

西洋と東洋の中間の地域、そこは、東から見ても西から見てもエキゾティックな国々です。東方とはヨーロッパから見ての方角です。本日は、音楽と踊りで、マケドニアからはじまり、トルコ、湾岸、エジプトへと旅をしていきます。

1. **マリオブスカトレセニカ**
マケドニアの曲です。
2. **ロンピロンピ**
トルコの特徴的な9拍子のリズムの曲です。
3. **ミザルー**
ギリシャの曲です。
4. **ワフワフ**
湾岸地域の曲で、ハリージと呼ばれる踊りを披露します。
5. **ライラットホブ**
エジプトの曲で、タイトルは「愛の夜」を意味します。
6. **アルフレイラワレイラ**
エジプトの曲で、タイトルは「千夜一夜」を意味します。
7. **ゼイナ**
同じくエジプト曲でフィナーレを飾ります。

アジアの身体とパフォーマンス

—アジアの伝統と現代—

国際関係学部教授 井上貴子

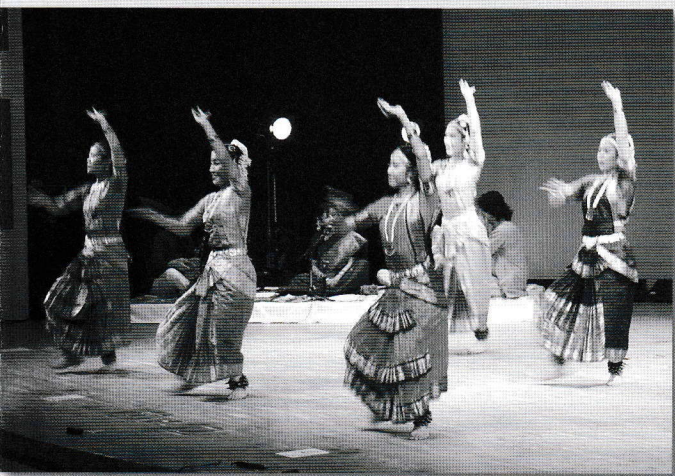
アジアは実に多様な顔をもっている。地理的にも非常に広大で、氷河を有するヒマラヤ山脈や灼熱の砂漠地帯が、アジアの中心部に位置している。地理的な多様性に応じてそこに住む人々の生活習慣、信仰や考え方、民族も多様である。イスラーム、仏教、キリスト教といった世界宗教以外にもインドやバリ島のヒンドゥー教のように数億の人口をもつ宗教が存在する。中国や韓国には日本人とよく似た顔つきの人々が多いのに、インド以西では顔つきも体型も全く異なる人々ばかりである。日本人は、欧米を旅するよりもアジアを旅する方が、数倍ショックを受けることが多い。アジアと日本が近くて遠いと感じられるのは、そのような多様性に対する私たちの認識が追いついていないせいなのかもしれない。

このような圧倒的な多様性を前にしてもなお、「アジア」と一言でくくれるような要素は存在するのだろうか。全く学術的ではないが、私自身がアジア各地の芸能を体験していくなかで、ヨーロッパの伝統的な古典舞踊にあたる「バレエ」などとアジアの舞踊を比べてみると、「アジア的な身体」のようなものが存在するのではないかと感じるようになってきた。バレエは天に向かって伸びるような動きが圧倒的に多いが、アジアの舞踊の身体は大地に根ざした動きが多いように感じる。バレエは足の裏全体をつけることを好まないが、アジアの舞踊では足の裏全体で大地を慈しむように動く。実際、プロの舞踊家に尋ねてみると、バレエの身体訓練では内側の筋肉が鍛えられ、アジアの舞踊の多くでは外側の筋肉が鍛えられるという。

今日、アジアは大きく変貌しつつある。飛躍的に成長する産業や高層ビル群を見ると、長年にわたって伝承されてきた芸能もいつかは失われてしまうかもしれない、という危機感にとられる。しかし、伝統とは変わらない、硬直的なものではない。そのときどきの生活様式に応じて、柔軟に新しいものを取り入れ、良いものを残しながら変容し続けてきたからこそ、人々の間にしっかりと根付いてきたのである。このような伝統的な要素をふまえた新しい作品も次々と生み出されている。そのような意味で、伝統芸能は、きわめて現代的なものだといってよいだろう。

さて、本学国際関係学部では、これまで数年にわたって「比較文化特殊講義」という科目で「アジアの身体とパフォーマンス」と題し、韓国、中国、タイ、インドネシア、インド、アラブなどアジア各地の舞踊の専門家を招いて、実際に体を動かしながら、アジアの身体とパフォーマンスの特性について考えるという体験型の講座を開講してきた。「アジア芸能の夕べ」は、この講座にお招きした、国内外で活躍中の専門家の先生方による、本格的な芸能公演である。昨年の第1回目は、中国、韓国、インドネシアのジャワ島、南インドの伝統的な芸能を楽しんでいただいた。第2回目となる今年は、初日にタイ舞踊と南北インドの古典舞踊バラタナーティヤムとカタック、二日目にインドネシア、バリ島のガムラン音楽と舞踊、アラブの舞踊ペリダンスの公演が実現することになった。

これらの芸能を楽しむコツのようなものはあるのだろうか。異文化コミュニケーションでは、言葉を交わして対話することはとても重要である。しかし、多様なアジアの言語を前にすると、それを習得するまでの道のりの長さには気持ちがなえてしまうかもしれない。しかし、本来、人間は言葉だけでコミュニケーションしてきたわけではない。「ボディーランゲージ」とよく言うが、相手が喜んでいるのか、悲しんでいるのか、怒っているのか、身体的な表現をみればよくわかるものである。コンピュータやケータイのような相手の見えないコミュニケーション手段のみが異常に発達した現代社会で、「パフォーマンス」という視点は、非言語的コミュニケーションの重要性を思い起こさせてくれる。芸能は異文化コミュニケーションへの第一歩であり、究極の形でもある。この機会に、気軽に異文化体験をしていただければと思う。





大東文化大学
DAITO BUNKA UNIVERSITY

国際関係学部

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL0493-31-1513
FAX0493-31-1512
HPアドレス <http://www.daito.ac.jp/>